

梅園叢書〓三浦安貞

野乃舍隨筆〓大石千引

おもひくさ〓本居宣長

閑窓瑣談〓佐々木貞高

還魂紙料〓柳亭種彦

擁書漫筆〓高田与清

西洋画談〓司馬江漢

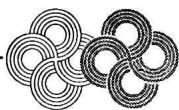
12

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第一期 第六卷
昭和二年九月廿八日發行
編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表 早川純三郎
發行者 吉川半七
發行所 日本隨筆大成刊行會



日本隨筆大成

〈第一期〉12

昭和五十年十月十五日 印刷
昭和五十年十一月一日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

發行者 吉川圭三

發行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五二〈代表〉
振替口座東京二四四番

製作 株式會社 たんちよう社

解 題

本書には、梅園叢書、野乃舎隨筆、おもひくさ、閑窓瑣談、還魂紙料、擁書漫筆、西洋画談の七種を収める。

梅 園 叢 書 三 卷

三浦梅園 著

著者は近世に於けるすぐれたる思想家である。所謂道学者の教誨隨筆というものは、固きに過ぎ、理を悟る前に倦怠を覚えるものが多い。本書は此れらと撰を異にし、秋夜燈下に独坐して、世態人情に思を致して草した藻塩草と自ら謙遜して居られるが、何れも教誨の意を寓しながら、読者に著者が問わんとする所を素直に諾ずかせるもののあるのは、流石梅園の学殖と人物の良さを思わしめるものがある。全編四十九章、「詩を説て道に志す人に諭す」に初まり、「施しをなしたまた施しを受けるの心得」に終っている。今現相を視てなるほどと感ぜしめるものもある。即ち、「医は仁の術といふべし。医者は仁の術を施者に非ず」といふ結論である。医は仁術なりと單純に考えがちな根本的な情性に一分析を与えた事になるうか。

本書は、寛延三年の自跋があるが、刊行せられたのは安政三年、活字本としては『梅園全集』、『百家説林』卷六、『日本隨筆大成』旧刊本卷六等に収められて流布している。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵の刊本を校合用として使用した。

三浦梅園に就いては本大成二期五卷に略記した小伝を見られたい。

野乃舎随筆 一卷

大石千引おおいちひ 著

著者は加藤千蔭門の国学者である。そうして栄花物語、大鏡など鏡物に力を致した人である。本書の内容は従つて、日本紀以下史書に頼られたものの考証と、当時の見聞談に依つて内容が形成されている。其の見聞談の中に、友人松本可員と云う針治の話や、板木師松五郎の偽幽霊に会う話などは珍とすべきであろう。松五郎と云う彫職は、其の業跡も不明であるが、此の逸話によつてとにかく、其の存在の確かめられるのは、大いに有難い。彫職の仕事は冊子として残るが、其の人を詳かにしない。本書は幕末国文学者の随筆、古典引用の考証と、当時の人の興味を持たれそうな記事で満ちている。初めに高田与清の序と巻末に女大石千世の文政三年の跋が附してある。この跋によると、此の草紙は三巻あったと云うが、現在はこの一巻のみ刊行されている。本書再刊に当つては静嘉堂蔵刊本によつて校合を加えた。なお国会図書館本には「柳文庫」(柳屋文人)、「阿波国文庫」(蜂須賀侯)、「狂歌堂文庫」(北川真顔)等の印記があつて、当時名家に本書が読まれた事が知られる。

大石千引は明和七年三月十四日江戸本所横堀に生れた。父は大石田隣と云つて、下野烏山藩の家臣であつたが致仕した。母は小松川氏で、千引は通称伝兵衛、又源左衛門、初名は貞見、字は道和、家号を星廬又は野乃舎と称した。漢学を随源三郎に学び、大学及論語を読んだのが廿歳の頃だと云う。和学は初め冷泉家門人横瀬氏に学んだが、橘千蔭に学ぶに及んで名を千引と改め遂に一家を成した。其の最も得意とした部門は、栄華物語及び大鏡等の研究であつた。性質は至極温和で名利の念が薄かつたと云う。岡本保孝著の『本朝古今人物考』によると、「大石平左衛門ト云云、モト町人ニテ湯屋也。後ハ和学者トナリ、岡田真澄ト軒ヲナラベテ居タリ。」とある。天保五年九月十三日享年六十

五歳で歿するが、歿する前日此の世の思い出にとて、友人知己門人等を集めて、歌筵を開き、寄菊祝の題にて歌会を催したと云う。かくて芝西応寺町三四（現港区）の法泉寺（真宗大谷派）に葬せられた。右墓記は藤浪和子著『東京掃苔録』によった。

おもひくさ 一卷

本居宣長もとけのりなが著

本書は一名を平波をな賀毛がも登のりという。当時喫煙も一般に行われた烟草についての雅文随筆で、枕草紙などの流れを汲むもので、流石宣長の随筆だけに、其の能文を賞する事が出来る。著作年代は、宝暦三年と云うから、宣長二十三歳、前年母勝子の意を体して医学修業の為に京都に遊学した事であった。この遊学によって、宣長は、堀景山に就いて漢学を学ぶが、又一方和歌国文を好んで、冷泉為村、北村季吟等の門人である新玉津島神社の社祠森河章尹の門人ともなっている。本書のある所以である。後年石出大春の序を附して刊行せられた。静嘉堂文庫には色川三中の旧蔵本がある。又日尾荆山の写本もあるが、此れには荆山の頭注書入が少々見えるが、本文は全く刊本と変りがない。刊本には樗屋蔵刻と刊記がある。本書は旧刊の『本居宣長全集』第五巻に収められて活字本としても流布しているが、最近の筑摩書房刊行の『本居宣長全集』には左のような識語等のある本が収められている。

癸酉仲秋

文化七年庚午年五月 神風伊勢意須比高

本居健臧草 清鳥写 内遠一校

なお本書には附箋もつけてあり、本居家で珍重しておられた事も知られる。本書大成本として再刊に当って、以上の諸本に拠って校合を加えた。

本居宣長は享保十五年五月七日、伊勢国松坂本町の小津家に生れた。父は定利、母は勝子。幼名は富之助、弥四郎、建蔵、栄貞等と云い、宝暦五年に至って宣長と改めた。また春庵、薺庵、中衛、鈴の屋等と号した。家は世々商家であったが、強記絶倫で、早くより四書の素読、猿楽謡曲、又射術を学び、茶湯、歌道にも潜心した。元文元年父が歿したため母と共に魚町一丁目に居を移り、以後母の手に育てられた。宝暦二年母の意に従い京都に遊学、儒学及医学を学び、宝暦七年には学成って、帰国小児科の医として医業に従った。然し国学者としての宣長は、宝暦八年六月から源氏物語の開講を初め、終始一貫晩年に至るまでこれを廃しなかったと云う。今其の講義の日取の伝えらるるものによると、二、六、十の夜は源氏物語、四の夜は万葉集、他の古典は多く三、八の日に行われたと云う。国学者の宣長が如何に勤めたかを窺い見る事が出来る。然も講義中と雖も、患者のある時は、すぐ其の由を聴講者に通して、急遽病家に赴いたとは儒医の研究家安西安周氏の語る所である。決して医家の仕事を軽んじなかったと云う。なお国学関係の事について大要を云えば、先ず二十七歳（宝暦六年）、契沖の著『百人一首改観抄』其の他を読んで古学への活眼を開き、真淵の『冠辞考』に接して更に其の意を深くし、宝暦十三年、真淵が田安侯の命により上京の途次、松坂にて之に会い名簿を送って入門してから、古代研究に心をひそめ、明和元年『古事記伝』の稿を起し、三十五年の歳月を経て『古事記伝』四十八巻を完成するに至り、国学四大人の称を後世より贈らる事になったのである。宣長の名声の挙るや、紀州侯徳川治宝の召す所となり之に仕えるに至った。享和元年九月二十九日歿した。享年七十二。宣長には寛政二年六十一歳の八月の自画像に、有名な、「しき嶋のやまところろを人とはゞ朝日ににはふ山さくら花」の歌が流布している。而して大正時代には巻たばこに「敷島」「大和」「朝日」があつて大いに大衆たばことして人々に親しまれた。此れは煙草専売局の智慧であつ

たであらうか。宣長以て瞑すべきである。今殆んど姿を消してしまったのは少々私共には淋しい。

本居宣長に就いては、其の全集も明治三十六年刊のもの、昭和元年刊行の『増補本居宣長全集』、『本居宣長稿本全集』、筑摩書房刊の『本居宣長全集』其の他があり、諸家研究も多いから、今は、村岡典嗣著『本居宣長』の一書を挙げておく。

閑窓瑣談 四卷

佐々木貞高
(為永春水) 著

本書巻頭に、東都教訓亭主人貞高撰とある。人情本に名を成した為永春水も、時勢の流れに抗し難く、随筆の筆を執って本書を成したのであらう。実名は越前屋長次郎と云って、柳原土手下柳町で古本の競取をしたり、軍書読みについて夜講の前座を勤めたと云われているから、随筆などに手をつけ、時好に適する街談巷説を取って、読者の興味を継ぎ止める事を忘れない随筆としている。其の一例を示せば、第二話の「安宅の閑井静女の古跡」とあるのは、文化十三年に『静女舞衣懷旧古帳』として名家の歌等を集めた集が出来て居り、蜀山人の『半日閑話』にもこの事が見えている。なお本書には御柳煙舎(歌川国直)筆の挿画もある。序文には阿部喜任(本草学者)の序文があり、文字は書家の生方寛が筆を執っている。内容便軟宣しきを得た随筆と云えよう。本書再刊に当り、内閣文庫の刊本によって校合を施した。なお、本書の後編(三卷、四卷)は、編集の都合上、第十四卷に載せる事となったから、読者の御了解を得たい。

為永春水 通称越前屋長次郎、隻眼なるゆえ人呼んで眼長といった。本名佐々木貞高、後に鴈鷄正輔と改めた。金竜山人、蓮池菴、教訓亭、為永正輔、三鷺、二世振鷺亭、二世南仙楚満人等の号があ

る。初め青林堂と云う貸本屋、中頃競取商となり伊藤燕管の門に入つては、為永正輔と云つて講師師となる。著書多くあれども必ずしも自ら筆を取りて草せしにあらざるものも多し。馬琴の『近世物之本作者部類』に既に云う所にして、稍人物として欠ける所があるが、人情本作家として『春色梅児誉美』以下の作あつて其の第一人者である。天保十三年四月幕府の譴を蒙り七月十三日獄中にて病歿した。享年五十四。墓は今北烏山妙善寺にある。(内田真三味氏調査)

為永春水の研究書としては、馬琴著『近世物之本作者部類』、水谷不倒著『列伝躰小説史』、神保五弥著『為永春水の研究』等がある。

還魂紙料 二卷

柳亭種彦 著

本書は種彦の考証随筆の最初の著書である。京伝の開いた近世風俗随筆を更に発展せしめたものが種彦の随筆であると云われている。還魂紙料は、水谷不倒著『列伝躰小説史』に見える解説が要を得ているから、其の文を引用して私の解題にかえたい。

「還魂紙料」上下二冊 文政九年十二月發行

此書を脱したるは文政甲申の春なりとあり。甲申は文政七年なり、此の書種彦が随筆の初刊なるべし。以下種彦の自序を引用。

「一日客あり。此稿本机上にあるをとりて、朗誦する事少時、大に笑ていふ。孔なき笛は耳よりほかに音を聞べし。絃なき琴は指ならずして調べしとは、禅機の活法なり。嗚呼この書用なき無絃無孔の琴管に劣り、破窓を補ふに等しとて投ず。己答ていふ。さあらば還魂紙料とせんか。客點頭て去。故に名とす。」

この書半心に「すきかへし」とあれど、名は還魂紙料くわんこんしりょうと読むべしと、斎藤月岑の『声曲類纂』に拠って森銑三氏はその著『隨筆辞典』に註記して居られる。本書「千年飴」より「煙草の一服一錢」に至る二十八項、多くの挿画を入れ、それ／＼其の当時の故文献俳書等をも引用。著者自身も亦此れを楽しんで居る趣も見える好隨筆である。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵の刊本に拠って校合を行った。

柳亭種彦については、本大成第二期第十四卷「足薪翁記」に小記したから、同書を見られたい。

擁 書 漫 筆 四卷五冊

高田たかだ与清ともきよ 著

本書四卷は、文化十三年刊行され、其稿は五十日ばかりで成ったと云う。前年十二年七月には書倉擁書倉がなり、書冊五万卷を蔵したと云う。この蔵書は与清自身の宝庫であつたばかりでなく、多くの知友学徒を利した事である。擁書の文字は北史李謐伝の丈夫擁書万卷、何仮南面百城、によると云うが、実は近藤正斎の書斎が擁書楼であるのを面白しとして名づけたと云う事もあつて、正斎は之を難じて、絶交したと云う話を例の「しりうごと」には伝えてゐる。それはさておき、この擁書漫筆は此れを背景として成った隨筆である。この書に挙げられた書目は、五百十部という。親切ではあるが、これは一寸がっかりする。然し内容は、古書を引用して事物を考証している部分と、知友等の略伝、詩歌等を附載している部分とに分かれるが、共に読者を利する所があつて、著者の篤学を思わせるものがある。巻頭に大田南畝の序があり、四卷末尾には北慎言の跋がある。挿画は高島千春の筆になり、刊行されたのは文化十四年耕文堂梓行である。

本書再刊に当っては、国会図書館本、内閣文庫本を参照して校合を加えた。

西洋画談 一卷

司馬江漢しほこうかん 著

本書はもと「春波樓画譜」中の一部であったかと云われている。然し「春波樓画譜」はこの西洋画談の広告に近刻とあるばかりで遂に公刊を見るに至らなかったと云う。江漢は本書中に、「西画の法に至りては、濃淡を以て陰陽凸凹遠近深淺をなす者にて、其真を摸せり云々」の条にも見られるように、蘭学の發達と共に先ず其の実用性が重んぜられて、世の注意を引いたと見られる面もある。と故岡村千曳氏は『紅毛文化史話』に述べて居られる。内容は江漢の学び得た蠟油画と銅版画の手法を説いたもので、柳斎和氣通撰の寛政十一年の序文がある。此の文によると我為堂初見江漢先生とあるから旧知の人であろう。今和氣柳斎なる人を人名辞書によって見たらば、江戸の儒、名は行蔵、字は大道、尚古道人と号す。嘉永六年四月歿す。年七十七。著述も『論孟異同編』其の他が挙げられている。恐らく此の人ではあるまいか。卷末に「春波樓藏版目錄」が挙げられている。

司馬江漢については本大成一期第二卷に略記したので同書を見られたい。

目次

梅園叢書	一
野乃舎随筆	充
おもひくさ	二五
閑窓瑣談（前編）	二三
還魂紙料	二〇三
擁書漫筆	三〇七
西洋画談	四九

（解題 丸山季夫）

三浦安貞先生著

梅園叢書

全三冊

浪華書肆

文海堂
宋榮堂合梓

目次

卷之上

- 一詩を説て道に志す人に喩す
- 一酒食欲の誠
- 一生前死後の理
- 一禍福は命也といふの論
- 一織田信長恩賞を賜ふ話
- 一雨森彦太郎軍功を譲る事
- 一武田信玄の知言
- 一後世を願ふに心得違ふ事
- 一上たる人の心得下たる者の痛となる説
- 一恕の道の説
- 一物毎に一得一失の理ありといふ説
- 一交際の道こゝろえ有べき事
- 一和歌を引て材芸ある人の箴を説
- 一人のあしきを捨てよきを取といふ訓

五 五 七 八 九 一〇 一〇 一〇 一〇 二 二 三 三 三 四 四

- 一継母と前家子との話
- 一盗人の名目種々あるといふ説
- 一村松喜兵衛の辞世
- 一技芸勝れたる人 慎かたの事
- 一劣れる者は見わけやすく勝れたる者は見わけがたしといふ説
- 一最負といふ言葉はいふまじきといふ説
- 一物の命をたつもまた助るの理ありといふ論
- 一学に志し芸に志す者の訓
- 一知ることは易く行ふことは難しといふ説
- 一よしとほむるもあしと毀るも 必察すべしといふ説

五 七 六 元 元 三 三 三 三 三

卷之中

- 一 早分別はやふんべつに後悔こうくわい多しといふ説せつ
 一 理窟りくつと道理だうりとの弁べん
 一 分限相応ぶんげんそうおうこそ長久てうきうの術じゆつといふ説せつ
 一 物に譬たとへて子たる者ものの教おしえを説とく
 一 上たる者かみは下の邪正じやせいをよく察さつせよといふ説せつ
 一 堂塔建立どうとうこんりやうの説せつ

卷之下

- 一 五行家ごぎやうかの説害多しといふ論ろん
 一 人の所ひとて長あちを扱あつかふべき事こと
 一 吝嗇りんしやく侯約きやくの弁べん
 一 謙けんを守れとの説せつ
 一 善人惡人盛衰ぜんにんあくにんせい天寿てんじゆの解くわい
 一 陰惡いんあく必ず禍わざはひを蒙かぶるの説せつ
 一 分別かんべつなき者ものにおぢよとの説せつ

三 三 元 六 七 八

- 一 おとし物ものしたる主ぬしと拾ひろたる者ものと曲直まぎやくちく
 一 裁判さいばんの話はなし
 一 物の怪ものけの弁べん
 一 仏舍利ぶつしやりの弁べん
 一 誠まことといふの説せつ
 一 碁將棋ぎやうぎに遊ぶ人ひとの箴いましめ
 一 書をよむは身を脩おさむるのためといふ説せつ

四 四 四 四 四 三

五 五 五 五 五 五 五

- 一 忠臣国ちゆうしんくにの爲ために命いのちを惜おしみまた身みをおしま
 一 ずといふ話はなし
 一 医いに望聞問切まうもんもんきつの四ツありといふ説せつ
 一 医いは仁じんの術じゆつといふ論ろん
 一 美服珍膳びふくちんぜん世よの弊へいを矯ためるの説せつ
 一 米こめに譬たとへて五倫ごりんの道みちを喻さす
 一 施ほどこしをなしました施ほどこしを受うるの心得こころえ

六 六 六 六 六 六 六

梅園叢書 卷之上

豊後 三浦晋安貞著

○詩を説て道に志す人に諭す

詩曰、厭^{しにいはく} 過^{よういふたるみちのつゆ} 行^{あに} 露^{ざらんや}、豈^{しくやせ} 不^{おもふ} 二 夙^{みちの} 夜^{おほき}、謂^{つゆ} 三 行^{まことに} 多^{こほろぎ} 露^{みち}。まことに道に志ん人は、此詩を味ふべし。是は女子淫人^{いんじん}をたつの言なりといへども、詩はその意ひろし。厭過^{ようぐ}と^うるほへる行^{みち}のほとりの露繁^{つゆしげ}ければ、夙^{つと}におき夜^{よは}におきて君^{きみ}に随^{したが}ひたくは思^{おも}へども、露^{つゆ}にぬれん事の傷^{いた}ましければとて、おもひとどまりたるなり。人各^{おの／＼}聖人^{せいじん}にあらざれば、情^{じやう}にひかれ慾^{よく}に動^{うご}かされざるはなし。或^{ある}は色^{いろ}により財^{さい}により酒食^{しゆしよく}により、あるひは憤怒^{ふんど}により好楽^{こうがく}により親愛^{しんあい}による。されど是^{これ}はかくはあるまじき事なりと、身^みの汚^{けが}れ露^{つゆ}にぬるゝ如^{ごと}く、よく／＼道^{みち}のあるべき所^{ところ}をもとめて、慾^{よく}をとどめんは、誠^{まこと}に君子^{くんし}の人^{ひと}なるべし。

○酒食欲の誠

酒食欲^{しゆしょく}の三^{みつ}、是人^{たがひ}の大害^{たいがい}といふべし。酒は少し吞^のときは憂^{うれい}をはらひ鬱^{うつ}をひらき氣血^{きけつ}を循環^{じゆんくわん}す。されど飲^い酒^{しゆ}の人^{ひと}節^{ほど}をしらず、あくまでのみ狂走^{けうそう}喧嘩^{けんわ}などして、宛^{あた}も狂人^{けうじん}にことならず、小^こにしては病^{やま}を醸^{かも}し、大^{だい}にしては礼^{れい}をうしなふ。むかし邵康^{せうかう}節酒^{せつしゆ}をこのむ。酒を名づけて太和湯^{たいわとう}といふ。只^{ただ}のんで微醺^{びくん}して止^やむ。